

演題2. 1992年から2001年までの歯科新来患者数と現在歯数の推移

○戸塚 盛雄, 福田 容子, 中村弥栄子

岩手医科大学歯学部歯科予診室

80歳で20本の歯を残すことを成人歯科保健の目標として、1989年厚生省は8020運動を提唱している。本学会第36回例会で1983-1992年の岩手医科大学歯学部附属病院新来患者を対象に、性・年齢別患者数と現在歯数の推移について報告した。今回1992-2001年における新来患者数と現在歯数の推移について調査した。本学歯学部附属病院の新来患者は1992年の5444名を最高に、多少の変動はあるが年々減少傾向で、2001年では4676名と減少していた。男女比は1:1.24-1:1.38で女性患者が常に多かった。年齢別では1992年10歳未満の患者は1062名であったが、2001年では520名となり約50%減少し、10歳代でも762名から575名と約25%減少していた。逆に70歳代では1992年224名が2001年では418名と約85%の増加を示し、80歳以上では62名が98名と50%以上の増加であった。20歳代から60歳代は各年代とも10年間で50-100名の減少であった。

現在歯数について3年間隔で調査した。30歳未満では一人平均現在歯数は27.7歯以上であった。1992年の平均歯数では30歳代:26.4歯, 40歳代:23.8歯, 50歳代:21.4歯, 60歳代:15.9歯, 70歳代:10.0歯, 80歳以上:5.0歯であったが、2001年では30歳代:27.7歯(1.3歯の増加), 40歳代:24.7歯(0.9歯の増加), 50歳代:21.7歯(0.3歯の増加), 60歳代:17.3歯(1.4歯の増加), 70歳代:12.2歯(2.2歯の増加), 80歳以上:9.2歯(4.2歯の増加)で、70歳以上の現在歯数の増加が著明であった。1992年、80歳以上の患者33名中20歯以上有する患者は2名(6.1%)であったが、2001年では58名中13名(22.4%)となっていた。

演題3. ラット Toll-like receptor 3 の cDNA 配列の同定

○田村 晴希, 山田ありさ, 斉藤 弘子,
村井 繁夫, 加藤 裕久

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

目的:Toll-like receptor (TLR) はI型の膜タンパク質で、病原体構成成分を特異的に認識する受容体である。ヒトでは10種類のTLRが同定されており、それぞれの受容体のリガンドが異なることが知られている。この中でTLR3は二本鎖RNAを認識し、ウイルスの感染防御に関わっていると考えられている。本研究ではラットTLR3のcDNA配列の解析を行った。材料・方法:Sprague-Dawley系雄性ラットの血液から全RNAを抽出し、ヒトTLR3特異的プライマーを用いてRT-PCRを行った。得られたPCR産物(469bp)のDNA配列を決定し、RACE法によりTLR3のcDNA配列を決定した(DDBJ登録番号AB116229)。アミノ酸配列の解析にはClustal WとProtein families database of alignments and HMMs (Pfam)を使用した。次にラットゲノムDNA配列とcDNA配列を比較した。またTLR3のコード領域を増幅するようなプライマーを用いてRT-PCRを行った。

結果:TLR3遺伝子のコード領域は2718bpであり、905アミノ酸残基のタンパク質をコードすると予想された。アミノ酸配列を比較したところ、ラットTLR3はヒトおよびマウスのTLR3と80.8%および91.2%の一致率を示した。ゲノムDNA配列と比較したところ、コード領域は4つのエキソンから構成されることが明らかとなった。さらにRT-PCRの結果、選択的スプライシングを受けたと考えられる変異体を同定した。

考察:アミノ酸配列の解析の結果、ラットTLR3はマウスTLR3とより高い相同性を示した。今後、どの組織や細胞でTLR3遺伝子の発現がみられるか検討したい。

結論:ラットTLR3のcDNA配列を決定した結果、マウスTLR3との高い相同性が認められた。